



目次	企画展 改革の10年	2
	寄贈資料の紹介	4
	移管資料の紹介	5
	博物館実習	6
	活動日誌	8

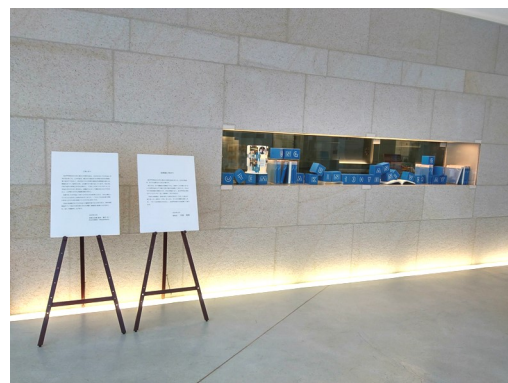
改革の10年

2020年12月15日(火) ▶ 2021年3月24日(水)

将軍山会館（安威キャンパス）にて、企画展「改革の10年」展を開催しています。追手門学院は2008年より学院の「改革」に着手し、2018年の創立130周年に至る10年間に大きく改革の花が開きました。この10年を「改革の10年」と称し、そのプロセスをまとめた『130年志』が2020年3月に刊行されました。

『130年志』では、創立から現在までの学院の歩みを単調に振り返るのではなく、特にこの10年間の学院のドラスティックな変貌を外部環境の変化とも関連させつつ「改革の10年」と位置づけて振り返っています。それぞれの取り組みの背後にはそれを牽引し、また下支えた多くの人々がいたことを忘れるわけにはいきません。組織が人によって構成されるものである以上、人が動かなければ組織は動きません。

今回の企画展では『130年志』で取り上げた出来事とともに、それに携わった人にも注目した展示をめざしました。一つひとつの出来事の背後にある人びとの存在を感じていただければ幸いです。



『130年志』立体展示

読む『年志』を体感していただけるように、エッセンスを近代アートのオブジェのように立体的に組み上げました。

デザインは『130年志』と同じく、大阪を拠点に活躍するデザインスタジオ「UMA / design farm」にいただきました。

追手門学院の365日

追手門学院130年の歴史のなかから365日の出来事をダンボール製の屏風仕立てにしています。



『130年志』校正紙

『130年志』は「改革の10年」を12の章立てで紹介しています。それぞれの改革に関して1章毎の原稿を集め、その草稿を内容ごとに色分けしてストーリー性のある構成へと再編集しているため、各章において特定の執筆者がいません。学院の歴史的トピックについては「ヒストグラフィックス」として情報を視覚要素により構成しています。



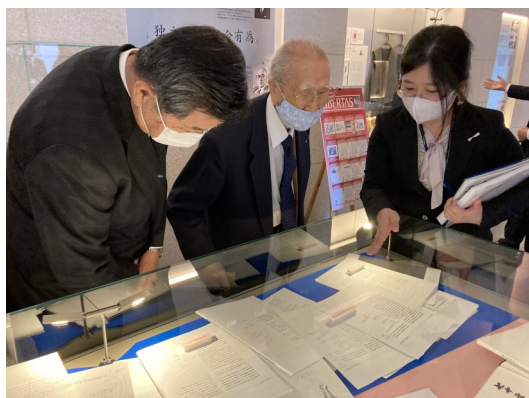
元専務理事 胸永等氏と改革

去る2020年3月21日に急逝された元専務理事 胸永 等氏は「改革の10年」をリードされたおひとりです。さまざまなガバナンス改革に力を注がれ、学院創立130周年の中心的事業である新キャンパス建設についても、川原理事長とともに陣頭指揮をとられました。学院志資料の保全にも日々努められ、寄贈品のいくつかを展示しています。



内覧会

企画展開催に先立ち、12月14日(月)にささやかな内覧会を行ないました。新型コロナウイルス感染対策を徹底したなか、学院志研究室の室員2名(齊藤・小倉)が解説を努めました。



※ 集合写真撮影時のみマスクを外しています。

寄贈資料の紹介

2020年7月20日(月)、京都市在中の関 春雄氏より関 原六(せき げんろく)に関する資料を学院志研究室に寄贈いただきました。

関 原六は第10代 第4師団長、初代 第44師団長などを歴任した陸軍中将です。寄贈者の関 春雄氏とは親子にあたります。明治22(1889)年に生まれた関 原六は、終戦間近の昭和20(1945)年4月12日に大阪赤十字病院で戦病死しました。大阪大空襲は病室の窓から見ていたといえます。



関 原六

追手門学院の前身は大阪偕行社附属小学校とい

い、大阪鎮台であった第4師団の施設の一部でした。学院創設者である高島鞆之助は初代 第4師団長を務めました。こうしたご縁から勲章をはじめ古写真、書簡などの遺品を一括して寄贈いただきました。ひとりの軍人の人生のほとんどを網羅したともいえる資料がまとまって残されている点は極めて貴重といえます。

学院志研究室では今回ご寄贈いただいた資料の調査をすすめるとともに、博物館実習の一環で学生がこの資料に触れる機会を設けました。今後は將軍山会館での展示公開も計画しており、学生・教職員・卒業生など多くの方々に観ていただけることを願っています。



勲一等瑞宝章などの勲章



博物館実習での写真撮影実習の様子

移管資料の紹介

2020年6月5日(金)、追手門学院小学校よりサンビー製の捺印機2台を学院志研究室へ移管しました。捺印機は小学校と大手前中・高等学校とでそれぞれ使われていたものです(写真は大手前中・高で使用)。かつては卒業証書に先生が1枚、1枚、この捺印機を使って朱印を押されていたそうです。現在は印字するようになったため、使われることがなくなり、長年棚上にしまわれていましたが、耐震補強工事の機会に学院志研究室へ移管いただきました。

製造元のサンビー株式会社は大阪市内に本社を構える印章用品メーカーです。この捺印機は「プッシュタンブ

捺印機」という商品名で、現在も販売されています。



2020年8月5日(水)、追手門学院小学校より学院長旧蔵資料、事業部旧蔵資料、安威キャンパス開設に係る建築図面など約100点の貴重な資料を学院志研究室へ移管しました。このなかで最も年代の古い資料は1928(昭和3)年10月6日から始まる「山桜會會計簿」です。この会計簿からは戦前の山桜会(同窓会組織)の活動内容の一端をうかがい知ることができます。

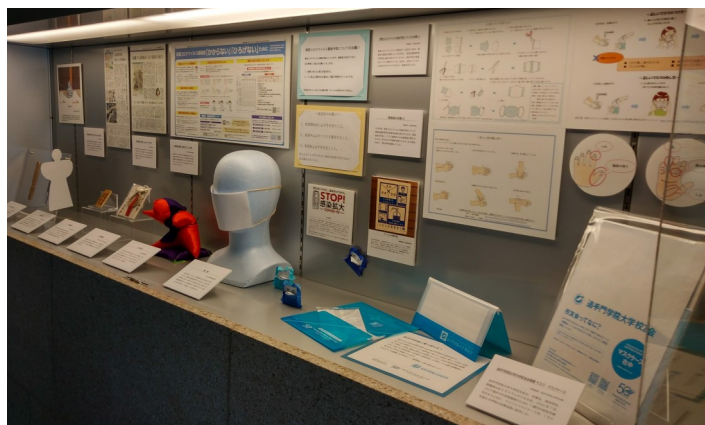
移管された資料は、調査・整理を終えたのち、大切に保管するとともに、自校教育などの場で活用いたします。

資料の寄贈・移管のお願い

学院志研究室では、追手門学院の歴史および学院関係者の事跡に関する資料を広く収集しています。広報誌などの学内刊行物、記念品、写真、フィルム、学生生活に関わるものなど、学院に関する資料がございましたら、末尾までお気軽にご連絡ください。

博物館実習

2020年8月24日(月)から28日(金)までの5日間、
将軍山会館にて博物館実習を行ないました。
今年は新型コロナウイルスの感染拡大により春
学期がオンラインとなるなか、身近となりつつ
ある感染症をテーマにした展示を企画し、資料
収集、写真撮影、キャプション作成などに取り
組みました。実習生6名に体験記を寄せていた
だきましたのでご紹介します。



今年は新型コロナウイルスが流行し、博物館実習の授業はオンラインで行った。慣れない授業の中で
は、実習生同士の話し合いが難しかった。また完成イメージが湧かなかったため、この調子で展示を完
成させられるのかという不安が大きかった。学内実習では初めに、かなりの時間を要してキャプション
文章を作成した。各々が考えた文章を元に、私が全体的に統一するように揃え、纏めたつもりでいた。
しかし、私の想像以上に「誰にでも伝わる正しい文章」を考えることは大変で、小さなキャプションの

一つ一つに多くの努力が詰まっていると感
じた。学内実習の最終日には、皆が積極的
に動き、納得いく展示が完成し、達成感を
得ることができた。

(心理学部3回生 高田 唯)



この博物館実習の授業は、展示の際以外
ほとんどリモートで行われた。このような
状態は初めてだったし私はリモート授業が
苦手だったので、展示実習までにいろいろ
決まるのか不安だった。しかし、リーダー
が先導をとってくれたり先生方が助言を下
さったお陰で、展示物や内容を決定するこ
とができた。いざ、全員で集まって最終調
整をする際も、途中難航した部分もあった
が先生方の手助けもあり、メンバー同士協
力し合いそれぞれの役割をしっかりとって

完成させることができた。完成した展示ケース内は予想以上に良くできており、多くの人に見てもらい
たいと強く思った。つたない部分もあるかもしれないが、今後も役立つ情報も展示しているので、ぜひ
将軍山会館に足を運んでほしい。

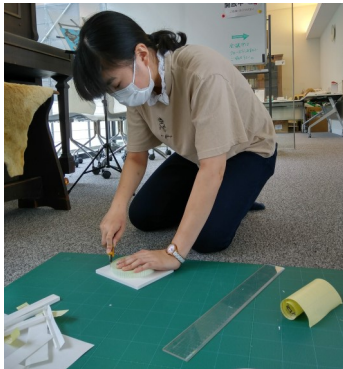
(地域創造学部3回生 森田 亜美)

何とかなってよかった、と思った。私たちは、新型コロナウイルス感染拡大のため、春学期は対面で
授業を受けることが出来なかった。そのため、私は展示を行うことはわかっていたが、そのイメージが
全くわからないまま将軍山会館で行う実習の当日を迎えてしまったのだ。2日目から本格的な展示制作が始
まった。想像以上にキャプションやパネルの文章が多かったり歴史が絡んで難しかったりしたため、修
正するのに長い時間を費やした。全部で5日間の日程だったが、文章の修正が4日目の前半まで続いた。
この時、最後まで終わらないかもしれない、と不安に思った。4日目の後半から実際に展示物を並べたり
パネルの作成をしたりした。この時、ゴールが見えてきたように感じ、不安な気持ちがどんどん晴れて
いった。5日目に展示が完成すると、とても安心した。何とかなってよかった、と心の底から思った。今
回の展示は、どうなるかわからない中みんなで協力して作り上げたものだとして強く感じた。この展示が、
感染症について知るきっかけとなればうれしいと思っている。

(地域創造学部3回生 河合 咲弥)

私は今回の展示で、歴史の中で疫病に対し人々がどのように考え、どのような対策をとったかというテーマで資料を集めた。自分の調べた範囲で、呪術的な、今でいうお守りの類の資料を提出したのである。その中に、「人形木簡（ヒトガタモツカン）」という名称で提出した資料があった。ところがそこで、当館担当の小倉先生から「人形木簡」という用語はないというご指摘をいただいた。早速確認してみると、確かに「人形木簡」という用語はどこにもない。では、どこで間違ったのであろうか。〇〇木簡というのは幾通りかある。しかし、「人形」と「木簡」とはジャンルの違う用語であった。続けて表記されている事例を見て、「人形木簡」という用語があると思い込んでしまったようなのだ。そのまま展示すれば大恥をかいたであろう。プロの研究者に検閲してもらうことの必要を改めて感じた次第である。

（2014年度心理学部卒業生 科目履修生 稲垣 誠）



今年の博物館実習は、新型コロナウイルスの影響によって春学期すべての授業がオンライン授業となった。しかし、オンライン上で展示内容について話し合うのは難しく、なかなか進めることができなかった。そして、ようやく全員と顔を合わせることができたのが、この学内展示の実習である。当日は、キャプション決めに苦戦したが、その後は、分担作業でスムーズに進め、何とか最終日までに終えることができた。また、実際に展示を行うことは、想像以上に大変だった。だが、同時に、完成した展示ケースを見て、達成感も感じた。どれも座学だけでは学ぶことのできない貴重な体験ばかりで、有意義な時間だった。

（心理学部3回生 西村 優花）

振り返れば、今回の展示の題材を疫病とすることは早い段階から決まったことだった。新型コロナウイルスの流行の中、資料の収集は身近なところで行わざるを得ず、展示資料の収集は難航した。しかし手作りの複製品を制作してくださった方がいたり、大阪では収集ができない資料を持ち寄ってくださった方もいたり、いざ展示が完成すると想像以上に見栄えの良い、展示が出来上がったと思う。

今、私たちは歴史を変える疫病の流行という何回も繰り返されてきた渦中にある。この半年間の間に失われたものは多く、しかしながら得たものもあったと思う。特に今回情報を扱う展示を作る中で、情報の真偽を問われる場面が非常に多かった。それはこの非常事態の中でも同じであると思う。デマに踊らされずに人々が行動するようになるかをこの目で見た。情報の真偽を問う作業がどれほど大切か、この展示実習、コロナウイルスの流行の中で身をもって知った。この体験はこの先何十年と生きる中で、そう得られるものではないと思う。

この度の展示をご覧になられている皆様様に置かれましても、目に飛び込んだ情報をまずは疑うという一つの作業を、自身が加害者とならないためにも心に留めておいてほしいと思う次第であります。

（地域創造学部3回生 岩崎 翔太郎）



6月 2日	将軍山会館の歴代学長パネルに新学長を追加
11日	SJによるテレワークを開始(7月16日まで)
7月 20日	関春雄氏宅にて聞き取り調査(藤吉、小倉)
31日	学院志研究室News Letter第12号を発行
9月 14日	将軍山会館の通常開館を再開
10月 8日	SJの学生3名が資料室でアーカイブ業務(来年1月まで)
9日	大阪府立中央図書館に年志等34冊を寄贈
11月 4日	将軍山会館にクリスマスツリーを飾りつけ
12月 14日	将軍山会館にて企画展「改革の10年」の内覧会を開催
15日	追手門学院創立130周年記念企画展「改革の10年」を開催(2021年3月24日まで)



SJ (スチューデント・ジョブ) レポート

私は、学院志研究室のSJを通して初めてテレワークを体験した。業務の内容は『130年志』の年表データの入力である。初めての体験ということで大変なことも多くあった。例えば、わからない漢字が多かったことだ。追手門学院の歴史は明治時代から始まる。そのため皇族の名前や陸軍の施設の名前など、現在では聞くことがなかったり見ることがなかったりする漢字が多く出てきた。最初はそれらに混乱し、インターネットで調べようとしてもどのように調べていいかわからなくて困った。今は漢和辞典を横に置いて、わからない漢字が出てくるときに画数索引で調べるようにしている。一方でよかったことは、家での作業であるため遅刻の心配をしなくてよかったことだ。だが、やはり、実際に学院志研究室に行って作業がしたいとも思った。テレワークだけだとコミュニケーションや緊張感が減ってしまうと感じたからだ。だから、はやくコロナウイルスがおさまって安威キャンパスにアルバイトしに行ける日が来ることを願っている。

(地域創造学部3回生 河合 咲弥)

編集後記

ニューズレター第13号をお届けします。3月の卒業式、4月の入学式が中止となり、春学期いっぱい授業が遠隔で提供されていたところ、夏休み明けから慎重に対面授業を一部で再開し、秋学期は学内でも学生諸君の姿が見られるようになりました。秋学期オリエンテーションや対面を再開した授業などでマスク越しに学生さんののこにこした表情を見ていると、とにかく学校に来たかったんだという印象を強く持ちます。授業が目当てかどうかはともかく、学生諸君にとって大学が「来たい場所」になっていることは関係者としてうれしいことで、これは他学舎においてもそうであろうと拝察されます。一部オンラインという困難を伴いつつ将軍山会館で実施された博物館実習受講生の声にもそうしたことがうかがわれます。ここで仕上げられた感染症に関する展示とともに、将軍山会館では『改革の10年/追手門学院130年志』をもとに「改革の10年展」が始まりました。感染対策は万全に、多くのみなさまにご覧いただけるのを楽しみにしつつ、ひきつづき、みなさまの健康と安全を念じています。

(藤吉 圭二)

追手門学院大学 学院志研究室 News Letter 第13号

■お問い合わせ先■

〒567-8502 大阪府茨木市西安威2-1-15

☎ 072-665-5062 (内線4405)

✉ archives-g@otemon.ac.jp

2021年1月6日発行

バックナンバーはホームページで
ダウンロードしていただけます

